

明治期落語速記の人称詞と用字意識

野村 雅 昭

【キーワード】 待遇 表記 ユレ 変字 漢字

1. 落語速記の資料性

日本語の速記法は田鎖綱紀により創始され、1882（明治15）年に発表された。田鎖の門人である若林珪蔵と酒井昇造は、落語家三遊亭円朝の断を速記し出版することを企画し、それは1884（明治17）年に三遊亭円朝演述・若林珪蔵筆記『恠談牡丹燈籠』として刊行された。また、1889（明治22）年には、落語・講談の速記を中心とする雑誌『百花園』が金蘭社から発刊され、演芸速記の盛行期を将来した。このような速記は、音盤レコードが普及する20世紀初頭以前の口頭語資料として貴重な意義を有するものとかんがえられる。ただし、清水康行（1998）のようにそれを口語資料としてあつかうことの可否に関して疑問を提出するものもある。また、『恠談牡丹燈籠』の表記については、清水（1988）、田島優（1998）の研究がある。

野村（2001a、2001b、2001c）は、雑誌『百花園』における落語速記の語彙調査をおこない、その口語資料としての価値につき考察をこころみた。特に、野村（2001c）では、『百花園』の落語速記の表記について以下の問題設定をおこなった。

- ア 速記において、どれだけ演者の音声表現は再現されたか。
- イ 速記から反訳の過程で、複数の人物がたずさわることがあったか。
- ウ 反訳に際して、全体の統一性はどこまで意識されたか。
- エ 文章装飾の段階で、速記者以外の人物の介在はかんがえられるか。
- オ 組版の段階で、植字工はルビ（振り仮名）をつけるのにどれだけ参加したか。

これについての調査結果は、以下のようにとまとめられる。

- ・アについては、完全な再現は期待できない。
- ・イに関しては、長編の人情断や講談とことなり、落語の速記では原則として単独の速記者がこれを担当することが相当の確率で実現したとみられる。
- ・ウの統一性については、十分にそのあとが確認された。
- ・エについても、イとおなじく、その痕跡はみとめられなかった。
- ・オのルビをつけた人物については、重要な部分には速記者がルビをつけ、自明な部分はかなりのところで植字工にまかされていたと推測される。

（120-122ページ要約）

要するに、落語速記は、音声資料としてはあまりにもそれから距離のあるものである。また、文字作品としてみるならば、不備で欠陥のおおいものである。その一方の立場からこれをみれば、不完全であることは当然である。しかし、それをみとめたうえで、これを言語資料としてみるならば、同時代の音声資料・文字資料のそれぞれに不足している部分をおぎなう存在として評価することができる。

本稿では、上記のイーエに関して、以下のA—Cを検証することを目的とする。いわば、野村（2001c）の調査がマクロの視点からおこなわれたのに対し、今回の調査はミクロな問題をとりあつかうことになる。

- A 同一速記者の時間をおいておこなわれる作業で、表記の統一性はどこまで保全されるか。
- B 表記のユレは、なぜ発生するか。例外・孤例の存在はどのように説明できるか。
- C 上記Bは、特に、登場人物の発話における待遇表現およびそれに対する速記者の用字意識とどのようにかわるか。

2.『百花園』掲載の「成田小僧」に関する調査

『百花園』は、1889（明治22）年5月に創刊された。終刊年次は不明だが、国会図書館には1900（明治33）年11月刊の第240号までが収録されている。その輪郭および体裁については、野村（2001a）で報告したので、ここでは省略にしたがう。

ここでとりあげる「成田小僧」は、三遊亭円遊口演／酒井昇造速記によるものである。三遊亭円遊（初代／正確には三代目といわれる）は、1850（嘉永3）年に江戸小石川に生まれ、1907（明治40）年に没した。円遊の口演には改作や新作がおおく、明治中・後期の東京語を反映したものであることがみとめられる。酒井は、1860（万延元）年に江戸にうまれた。若林珪蔵とともに『牡丹燈籠』の速記にあたり、実際には若林よりも、おおきな役割をはたしたといわれる。

「成田小僧」は、3回にわたり、『百花園』に掲載された。

- ① 成田小僧 1889. 5. 10 第1巻第1号 pp. 31-42
- ② 成田小僧（下ノ巻）第巻回 1890. 11. 5 第3巻第37号 pp. 525-538
- ③ 成田小僧（下 巻）第二回 1890. 11. 20 第3巻第38号 pp. 563-569

「成田小僧」は、二代目春風亭柳枝（1822〈文政5〉—1874〈明治7〉）が得意としたとされる人情噺であるが、全容はよくわかっていない。近親相姦が筋にからむなど、幕末期の退廃色が濃厚な作品だったと推定される。「成田小僧」という演題も、本来のものではなかったとみられる。円遊は、その発端部分を滑稽噺として独立させ、①として演じていたようである。円遊以外の演者による「成田小僧」という演題の速記は、円遊没後に二、三のこっているが、どれも①の部分だけを演じたものである。円遊が①を演じたときは、②③を演じる意図はなく、②③を演じることにした時点で「下」という名称をもちいたものとみられる。以下では、便宜にしたがひ、①を「上」とし、②③を「下」とする。②と③は、一席の口演を都合で分載したものである。

すなわち、[上] と [下] の口演時には1年半の間隔がある。速記者はおなじ酒井昇造であり、速記を文字化する過程で、用字意識にどのような差異がみられるのかを検証するのに適当な材料である。

3. 梗概と登場人物

この断のあらすじは、以下のとおりである。

本郷春木町の塗物商十一屋の若旦那清三郎は、父である大旦那に命ぜられ、深川不動に代参し、供につれた気に入りの小僧長松のすすめで、料理屋松本で食事をする。そこで清三郎は芸妓小千代をみそめ、ふかい仲となる（[上]）。

清三郎の放蕩をいましめるため、十一屋の大旦那は清三郎を座敷牢におしこめるが、清三郎はそこをぬけだし、行方不明となる。そのことをしらず、小千代は病の床についている。小千代の義母である置屋大和屋の女主人は、小千代の気に入りの幫間花洲に小千代をなぐさめてくれるように依頼する。花洲は小千代をみまうが、たまたま同行した幫間船八が清三郎の行状につきあらぬことを耳にいれたため、小千代は家をとびだしてしまう。義母と花洲はあとをおう。十一屋の大旦那は、清三郎が出奔した日を命日とさだめ、長松を供につれ、寺参りをする。その帰路、吾妻橋から身投げをしようとする小千代をたすける。話をするうち、小千代は清三郎の実の妹であったことがわかる。ふたりは双生児で、小千代は生後すぐ根津の御家人のところに養女にだされていた。そこへ十一屋の番頭がかけつけ、清三郎から手紙がとどき、サンフランシスコで無事にいるとしらせる。小千代は、なおさらのこと死んで貞女の亀鑑をたてようというのが、長松の「ア、是は鏡を立たい訳だ、素が塗物屋の鏡台（同胞）だ」という一言で、オチになる（[下]）。

そのほかの登場人物には、松本の女中、花洲の女房お新、大和屋の下女、人力車の車夫などがある。

4. 落語速記における表記のユレ

この調査でいう「表記のユレ」とは、以下のようなことをさす。

【例1：ナゼ】

何故 奈是

[上] 6 -

[下] - 2

〔1〕何故^{なげ}扇^{おかいし}で若衆^{せな}の背^{せなか}を打^ぶつんだ (上・清三郎、p. 35)

〔2〕奈是^{なげ}お前は死^{あやうだい}んで貞女^{かづみ}の亀鑑^{たて}を立^{たて}る (下・大旦那、p. 569)

この断では、「ナゼ」という語は、[上] では6回、[下] では2回、計8回つかわれている。ただし、[上] ではすべて例文〔1〕のように「何故」と表記され、[下] ではすべて例文〔2〕のように「奈是」と表記されている。このばあい、[上] と [下] とでは2種類の表記があることになり、表記にユレがみられるが、[上] [下] のそれぞれ内部では統一がたもたれており、ユレは存在しない。

つぎにあげる【例2】は、ある語の表記に関して、[上]あるいは[下]の内部でユレがみられるばあいである。

【例2：イウ】

	云ふ	言ふ	謂ふ	いふ
[上]	35	—	—	—
[下]	30	4	1	3

〔3〕小供衆のお智慧が進むで来たと云ふのは実に之が日本盛大の^{もと}原因と^{いっ}て宜しい位で
(下・円遊、p. 525上段8-9行目)

〔4〕小供衆の前で^{うっか}嘘^{いげ}りお化……と申したら／○「円遊文明国に幽霊は有りませんヨ／と謂は^{いっ}れまして
(下・円遊、p. 525下段1行目)

〔5〕長「世間で皆が然^{うっか}う^{いっ}て居ますヨ、若旦那は阿父^{おとう}さんが殺したと然^{いっ}う^{いっ}てらア旦「馬鹿な事を言ふナ、親たる者が我子を殺す奴があるものか
(下・小僧／大旦那、p. 565上段9-12行目)

〔6〕忌^いですヨ、又其^{いっ}んな事を言て人を悦ばしてサ
(下・小千代、p. 536)

〔7〕若旦那の事をいふと阿母^{おつか}さんが小言を云ふし
(下・小千代、p. 535)

〔8〕世間で貴公^{あなた}の事を鷹^{たか}が鷹^{たか}を産んだといふのは
(下・小僧、p. 565)

〔9〕其頃は未だ開けん時分で、女と男の^{こども}子供を産んだものは畜生だといふから
(下・大旦那、p. 566)

[上]はすべて「云ふ」で統一されていて、ユレはない。それに対し、[下]は「云ふ」が大勢をしめるが、それ以外に「言ふ」「謂ふ」「いふ」の3種の表記が計8例みられる。このうち3例は演者である円遊の地の語りとして、冒頭のマクラの部分にあらわれる。〔3〕の最初の例は「云ふ」だが、つぎは「言ふ」となっている。落語速記では、このように近接して同一の語があらわれるばあいに、一般的な表記形とはことなるとみられる用字がある。かりに、これを「変字」とよんでおく。ただし、それが変字であるか多義語の意味・用法のちがいによるカキワケであるかの判断はむずかしい。あるいは、単なる表記の不統一である可能性も否定できない。

「言ふ」の4例のうち2例は、〔3〕およびそれと同様にマクラでもちいられたものである。他の2例は、〔5〕と〔6〕である。〔5〕は変字の可能性があるが、〔6〕は理由がかんがえにくい。カナガキの「いふ」は、〔7〕〔8〕〔9〕の3例である。〔7〕は変字だとすれば、非一般的な「いふ」が先にあり、一般的な「云ふ」が後になっているのが問題となる。〔8〕〔9〕は、「世間デー般ニソウイウ」という意味でつかわれている点で共通するが、〔5〕には同様の例が「云ふ」で表記されており、検討の余地がある。

この表記のユレと語形のユレが複合しているのが【例3】である。

【例3：ホントウ／ホント】

	真正	真実	本当
[上]	14	2	—
[下]	—	—	15

- [10] 旦那「パー杯などを入れやァがッて真実ほんとうに為やうが
 無ねエノウ……………早く往いつて来い
 若旦那「へいつ往て参ります
 小僧「へいつ往て参ります……………真正ほんとうに驚いたナ早
 く往て来いなんテ (上、p. 34上段7-11行目)

- [11] 阿父おとつさんが鳶あなで鷹たかだてエますぜ真実ほんとうに感心 (上・小僧、p. 34上段16行目)
 [12] 何んだ隊長なんて真正ほんとうに困る奴だ (上・清三郎、p. 34下段12行目)
 [13] 夫それが出来上つて見ると本当ほんとうに能く出来ましたから (下・義母、p. 528)
 [14] 本当ほんとうに然云ふ事なれば私が探しませう (下・小僧、p. 566)

[上] では「真正」、[下] では「本当」が一般的な表記である。例外である「真実」は、[上] で [10] [11] のようにつかわれる。[10] の7行目の「真実」と10行目の「真正」は、近接しているだけに、変字のようにもみえる。しかも、前者には「ほんとう」、後者には「ほんと」というルビが付されている。しかし、[11] の「真実」のルビは「ほんと」となっていて、一致しない。「ほんとう／ほんと」の漢字表記とルビの対応関係は、以下のようになっている。

	真正	真実	本当
ほんとう	6	1	2
ほんと	8	1	13

この傾向からみると、語形のユレをルビに反映させる意識は、かなり明白である。ちなみに「成田小僧」をふくむ円遊口演12席の「ほんとう／ほんと」の出現比は、51/63となっている。しかし、それが用字に対応しているとはみられない。

なお、[10] の8行目と10・11行目では動詞の「イク／ユク」は「往て」となっているが、9行目では「往いつて」となっている。[上] では「イク／ユク」18例中16例が「往」で表記され、2例が「往」である。これが変字だとすれば、異体字のレベルでそれがおこなわれていることになる。

5. 人称詞と待遇意識

前項でみたように、落語速記には表記のユレというべき現象が存在する。それが速記者のなんらかの意図のあらわれであるかどうかを検証するために、以下では人称詞を中心に表記の実態を分析することにする。その理由は、この時代の人称詞には種々のものがあり、それが登場人物相互のあいだでつかい分けられていることによる。すなわち、演者である落語家がそれをどのように認識し、速記者がそれをどのように表記に反映させているかをみるのに好都合だからである。たとえば、野村(2001a)で指摘したことだが、「成田小僧」には、つぎのような例がある。

- [15] 大和屋のお袋は義理ある阿母おつかさんで、妾の本当の阿父おとつさん阿母おかあさんが妾わたしを根津の大滝と云ふ御家人の処へ遣はした処、瓦解のとき妾は芸妓に成ましたが、本当の阿母おつかさん阿父おとつさんは有ません (下・小千代→旦那那、p. 568)

現代語で父母をさす「おとうさん」「おかあさん」は、明治末期から東京で普通につかわれるようになったが、それ以前の江戸語・東京語資料には使用例がすくないとされる。幕末に江戸小石川にうまれた演者の円遊が明治20年代の初めにそれをつかいわけていることは注目される。それが速記者の恣意ではないと断言はできないが、速記者が円遊の発話を精確にかきとどめたとみるのが自然だろう。これは語形の問題で表記とは直接のかわりはないが、人称詞を分析の対象とする理由の一端はこのようなところにある。

この断で「人称詞」としてみとめられるものを、以下にかかげる。

〔自 称〕ワタシ₇₁ ワタクシ₂ テマエ₂ ワッシ₉ ワレワレ₁ オレ₁₁

〔対 称〕アナタ₂₉ オマエサン₁₆ オマエ₁₆ キサマ₅ テメエ₃

この断のなかの登場人物がどのような関係にあるか、また、どのような位相に属するかをみるために、文末でもちいる指定表現を一覧にして以下にしめす。

〔主要登場人物の指定表現〕

	デゴザリマス	デゴザイマス	デアリマス	デ ス	デゲス	ダ
大旦那	—	—	—	—	—	12
清三郎	—	—	—	1	—	10
小千代	—	1	—	6	—	—
義 母	—	—	2	12	—	—
お 新	—	1	1	1	—	1
番 頭	—	2	—	—	1	—
小 僧	—	1	2	19	5	18
花 洲	—	2	—	10	1	6
船 八	—	—	—	—	2	2

円 遊	2	9	1	1	2	—
-----	---	---	---	---	---	---

※「デアリマス」はすべて「デハ（ヂヤア）アリマセン」の例。

この一覧からは、登場人物を3類にわけることができる。(A) 大旦那と若旦那の清三郎とは、「ダ」を専用している。清三郎が1回だけもちいている「デス」は大旦那に対してのものである。このことから、この断のなかではこのふたりが上位者として位置づけられることがわかる。(B) 小千代、義母（小千代の母）、お新（花洲の妻）の3人の女は、「ダ」をほとんどつかわず、「デス」が主体となっているのが特徴である。(C) 他の4人の男は、「デゲス」をつかうことで、ほかの人物と区別される。ただし、「デゲス」は当時落語家や幫間など芸人にはよくつかわれたものなので、花洲と船八はともかくとして、番頭や小僧など商家の奉公人が常用したかどうかは疑問である。落語家でも円遊は「デゲス」を多用することで有名だった。地でも、円遊は2回使用している。その口調が登場人物にもあらわれたとみられないでもない。いずれにしても、B・Cのグループでは、「デス」が基調となっているのは、明治初期では一部の階層でしか使用されなかった「デス」の明治20年代初頭における普及状況をうかがわせるものとして注目される。円遊が地では

「デゴザイマス」を基調としているのとは、対照的である。

6. 人称詞と用字意識についての分析

6.1 自称詞

自称のなかで、もっとも多用されるのが「ワタシ」である。

【例4：ワタシ】

	俺	私	妾	予	吾儕
[上]	15	4	2	3	—
[下]	—	9	8	—	30
俺	[上] 小僧→清三郎 ₉ 小僧→女中 ₆				
私	[上] 小僧→大旦那 ₂ 小僧→清三郎 ₁ 子ども→役人 ₁				
	[下] 小僧→大旦那 ₁				
	花洲→義母 ₂ 花洲→下女 ₁ 花洲→小千代 ₄				
	船八→小千代 ₁				
妾	[上] 女中→小僧 ₂ [下] 小千代→大旦那 ₈				
予	[上] 清三郎→小僧 ₃				
吾儕	[下] 義母→お新 ₆ 義母→花洲 ₁₀ 義母→車夫 ₃				
	お新→花洲 ₁ 下女→花洲 ₁				
	小千代→花洲 ₅ 船八→下女 ₂				
	花洲→小千代 ₁ 花洲→船八 ₁				

[上] では、小僧の使用例が18例ともっともおおい。そのほかは、清三郎の3例と女中の2例、および、マクラのなかの会話である「子ども→役人」の1例である。以下にあげるように、清三郎と女中の使用する「ワタシ」の表記は「予」と「妾」で統一されている。

[16] 若「タイ夫れは^{わたし}予の箸だヨ

小僧「然なら俺^{わたし}の箸と取替へ升うか (上・清三郎→小僧／小僧→清三郎、p. 40)

[17] ホ、コレハ妾^{わたし}が過言りましたネ (上・女中→小僧、p. 40)

小僧の使用する「ワタシ」には、[16] の「俺」のほかに「私」があてられる。「俺」が基本であるが、[18] のように「私」もつかわれる。

[18] 私^{おつか}の生れる時に阿母さんが無闇にいkindそうデ (上・小僧→大旦那、p. 32)

これをふくむ2例は、大旦那に対するものである。つまり、小僧が「ワタシ」をつかうときは、大旦那に対しては「私」、そのほかの人物に対するときは「俺」となっている。

[下] でも小僧が「私」をつかうばあいが1例あるが、これも大旦那に対するものである。なお、この[18] の「私」にはルビがない。『百花園』の速記は総ルビを原則とするが、数詞や前後の使用例からヨミカタが自明なものは省略されることがある。

小僧の使用する「ワタシ」には、もう1例「私」があてられたものがある。

[19] 先方^{むこう}の芸者は今頃惚気て居ませう……アノチヨイと正孝さん花洲さん聞いてお

呉れヨ下の御座敷にネ何家の子息さんと小僧さんが居たんだが私^{わたし}はソノ子息
 んに岡惚れを為たノ (上・小僧→清三郎、p. 32)

これは清三郎に対してもちいられたようにみえるが、実は小僧が下の座敷ではこういう話をしているのではないかと想像をたくましくしている場面である。この「私」の使用者は、まだ口をきいていない芸者小千代である。小千代は〔下〕では「妾」を基調とするが、ここでは小僧の発話中の人物として区別されればよいとため、「私」がつかわれたとみられる。すなわち、〔上〕では「ワタシ」の表記は整然としていて、みだれがない。

「妾」は〔上〕の2例のほかに、〔下〕では〔20〕のように、小千代の旦那に対する発話に8例がもちいられる。ところが、小千代は花洲に対しては5例とも、〔21〕のように「吾儕」をもちいている。これは上述の小僧のばあいと同様に、発話の相手がだれであるかにより漢字表記がつかいわけられている例とみてよい。

〔20〕 ハイ、有難う御座いますが、何うしても妾は死な、ければなりません

(下・小千代→旦那、p. 567)

〔21〕 吾儕^{わたし}は打棄^{うつちや}られて仕舞ひましたノ

(下・小千代→花洲、p. 534)

「吾儕」は、〔下〕では男女の別なく一般的にもちいられる。ただし、花洲だけは〔22〕のように「私」が普通である。そして、〔23〕〔24〕が例外となる。

〔22〕 私^{わたし}も疾に御機嫌同ひに出なければならぬんですが、(下・花洲→下女、p. 533)

〔23〕 三八はまた吾儕^{わたし}は音羽屋に成るッて反^{そつ}繰^{くり}返^{かへ}て些^{ちひ}とも歩行^{ある}けない

(下・花洲→小千代、p. 536)

〔24〕 船八さん、和郎は後で会ふなら会ふとして、さきへ吾儕^{わたし}一人で行くから、お梅どん、船八を頼みます

(下・花洲→船八、p. 533)

〔23〕は、花洲が小千代に昔話をしている、そのなかで朋輩の仲間である三八の発話としてつかっているものなので、納得される。しかし、〔24〕は解釈がむずかしい。船八に対する花洲の「ワタシ」はこれ1例しかないの、保留としておく。

「ワタシ」以外の自称詞では、「オレ」の使用例がおおい。

【例5：オレ】

	俺	予	乃公
〔上〕	—	—	1
〔下〕	2	8	—

乃公 〔上〕旦那→清三郎₁
 俺 〔下〕花洲→お新₁ 花洲→小千代₁
 予 〔下〕旦那→小僧₃ 旦那→小千代₃

〔上〕では、旦那に「乃公」がつかわれるが、〔下〕では「予」がもちいられる。これは、〔上〕で「予」が清三郎の「ワタシ」につかわれるためであるとみられる。〔下〕では清三郎は登場しないので、「ワタシ」「オレ」とも清三郎の使用例がない。

〔25〕 過般^{こへん}も乃公^{おれ}の随行をして頭へ痰^ひを吐ッかけアヤがつたから

(上・旦那→清三郎、p. 32)

[26] 夫^{それ}ちやアなんだ、お前は^{おれ}予^{せがれ}の 倅^{おれ}の妹だ (下・大旦那→小千代、p. 568)

[27] 長孝は眼^{ちやうかう}が大きいので、俺^{おれ}は団十郎だてんで、ウンと少し前へ屈^{あぐら}んで歩^{ある}行くと
溝^{どぶ}へ落^{おつ}去^{ころ}たが、 (下・花洲→小千代、p. 536)

「オレ」は、同輩に対してつかうほかは、目上の者から目下の者に対してつかわれる。大旦那のほかは花洲に使用例がみられる。1例は女房に対するものだが、もう1例は[27]の小千代に対する発話中のものである。ただし、これは[24]とおなじく、話中の人物である幫間長孝の自称としてつかわれているので、問題はない。

そのほかの自称詞については、分析を省略するが、若干の説明をくわえておく。「ワタクシ」と「テマエ」は、いずれも演者の円遊が地の部分で「^{わたくし}円遊」「^{てまへ}円遊」のようにもちいたものである。「ワッシ」は用例数は比較的小さいが、8例が[下]で幫間船八が「^{わっし}小哥」としてもちいている。幫間として登場する人物には、ほかに花洲がいるが、船八は花洲より格下の芸人とされている。花洲は「ワッシ」をもちいていない。他の1例は[上]で小僧が「俺等^{わつしたち}」としてつかったものである。「ワレワレ」は、車夫の発話として「我々^{われわれ}」のようにつかわれる。下層の人物の発話としては異例ともみられるが、ここでは「あらたまり」の表現としてもちいられている。

6.2 対称詞

対称詞は、「アナタ」「オマエサン」「オマエ」の3種で、9割近くがしめられる。相手に対する敬意の程度は、ほぼこの順である。この時代の「アナタ」は現代とことなり、待遇の度はたかい。

【例6：アナタ】

	尊公	尊台	貴嬢	貴公
[上]	16	1	—	—
[下]	7	—	4	1
尊公	[上] 小僧→大旦那 ₂ 小僧→清三郎 ₁₃ 女中→清三郎 ₁ [下] 小僧→大旦那 ₄ 小千代→大旦那 ₃			
尊台	[上] 清三郎→大旦那 ₁			
貴嬢	[下] 花洲→小千代 ₂ 船八→小千代 ₁ 小僧→小千代 ₁			
貴公	[下] 船八→花洲 ₁			

「尊公」は、[29][30]のように、大旦那と清三郎に対してもちいられる。小千代に対しては[31]の「貴嬢」がつかわれる。

[29] 七五三に眼を付けて尊公^{あなた}の顔を見る様な見ない様な (上・小僧→清三郎、p. 40)

[30] 尊公^{あなた}は若旦那の阿父さんですか (下・小千代→大旦那、p. 567)

[31] 貴嬢^{あなた}の親孝行は世間で評判ですよ (下・花洲→小千代、p. 534)

大旦那に対しては、1例だけ[32]の「尊台」がつかわれている。これは清三郎から父親に対するもので、一般の「尊公」と区別するためにもちいられたとみられる。

[32] 今日^{あなた}は尊台不動さまエ (上・清三郎→大旦那、p. 33)

以上の「アナタ」とはややことなるのが[33]である。船八は花洲のことを師匠といっ

たりもするが、直接の師弟関係ではない。基本的には「オマエサン」を使用する。ここでは自分をほめてくれたことへの札の意味もあり、「アナタ」をつかっている。それを用字のうえでは「貴公」であらわしているとみられる。

- 〔33〕 貴公は大変に内所へ行てちつし小哥の事を誉て下すツたんで（下・船八→花洲、p. 532）
「アナタ」より待遇の度合いがややさがるのが「オマエサン」である。

【例7：オマエサン】

	和郎	和女	お前	尊母	
〔下〕	4	5	6	1	（〔上〕には例なし）
	和郎	義母→花洲 ₄			
	和女	花洲→小千代 ₃ 船八→小千代 ₂			
	お前	船八→花洲 ₃ 小千代→花洲 ₂ 小千代→小僧 ₁			
	尊母	花洲→義母 ₁			

「オマエサン」の特徴は、使用者と被使用者とのあいだに、決定的な目上と目下という関係がうすく、丁寧な物言いをあらわす、社交的な表現効果をともなうことにある。以下の例文にみられるように、「和郎さん」が男に、「和女さん」が女につかわれるのはいうまでもない。「お前さん」は、「和郎」「和女」よりも敬意のひくい用字とみられる。

- 〔34〕 其病の源は和郎さんおまへもご存じの本郷春木町の塗物屋アノ十一屋の江崎の若旦那清三郎はんネ（下・義母→花洲、p. 527）
〔35〕 姐さんおまへ和女さんおまへは余り温順おとなししいからいけないんだ、（下・花洲→小千代、p. 534）
〔36〕 お前さんが行けば、何処までも小哥ちつしア跡を尾いてきます（下・船八→花洲、p. 532）

以上の例にくらべると、つぎの〔37〕は用字の面では待遇価値がたかいようにみられる。これは芸者置屋の女主人で、「アナタ」をつかってもよいような相手に対する配慮からの用字とみられる。

- 〔37〕 尊母さんが被仰るなら幾らでも宜しう御座いますおまつやが（下・花洲→義母、p. 531）

「オマエ」は、現代では使用者と被使用者のあいだに上下の差がみられるばあいがおおい。江戸ことばでも幾分の敬意はのこっていたようだが、この断の使用例では現代とそれほど差はなく、16例中13例が大旦那の使用例である。

【例8：オマエ】

	和郎	和女	お前	
〔上〕	4	1	—	
〔下〕	1	6	4	
	和郎	〔上〕大旦那→清三郎 ₂ 大旦那→小僧 ₁ 小僧→清三郎 ₁		
		〔下〕花洲→船八 ₁		
	和女	〔上〕小僧→女中 ₁		
		〔下〕大旦那→小千代 ₆		
	お前	〔下〕大旦那→小千代 ₄		

大旦那以外の3例は、小僧の2例と花洲の1例である。小僧と花洲の使用例を、[38]—[40]にしめす。

[38] 物騒な顔だ和女の顔ハマチ入らず (上・小僧→女中、p. 36)

[39] 鬢の乱れ髪枕の咎よ夫を和郎に疑られと云ふ三下り頭髪を御覧なさいヨ
(上・小僧→清三郎、p. 39)

[40] (= [24]) 船八さん、和郎は後で会ふなら会ふとして、さきへ吾儕一人で行く
から、お梅どん、船八を頼みます (下・花洲→船八、p. 533)

[38] は、小僧が料理屋の女中に対してつかったもので、ほぼ同等の相手につかった例である。[39] は小僧の清三郎に対する発話だが、端唄の文句なので問題はない。[40] には、かるい敬意がのこっているようである。上述のように船八は花洲の弟子分であるが、直接には「船八さん」とよびかけていることから、多少の配慮が感じられる。そうでなければ、「お前」でもよいはずである。

それと関連して、「お前」はすべて大旦那の小千代に対する使用例であることが注目される。また、大旦那は小千代に対して、「和女」をつかってゐる。

[41] 寺参りに参た帰りに和女を助けるのも何かの縁だらうからマアマア待なさい
(下・大旦那→小千代、p. 566下段)

[42] 殊に和女の親御の歎きも想やらるゝ、マアマア気を静めなさい
(下・大旦那→小千代、p. 567下段)

[43] 其んならお前若し鶯鶯切の守袋を以て居やアしないか
(下・大旦那→小千代、p. 568上段10行目)

[44] (= [26]) 夫ぢやアなんだ、お前は予の倅の妹だ
(下・大旦那→小千代、p. 568上段14行目)

大旦那と小僧は、墓参の帰りに、吾妻橋から身をなげようとする女をひきとめる。その時点では、もちろん女の素性はわかっていない。その女に対しては「和女」([41]) がつかわれる。小僧が小千代の顔をしていたので、女が小千代であったことがわかる。それでも、大旦那は小千代と初対面なので、「和女」([42]) がつかわれる。小千代は身の上をかたる([15] 参照)。それをきいて、大旦那は守り袋のことをたずねる。その瞬間から「お前」([43]) にかわる。そして、自分の娘であることを確信してからあとは、「お前」([44]) がつかわれる。

すなわち、ここでは「和女」と「お前」がつかい分けられていることがわかる。見ず知らずのわかい娘には、「オマエ」をつかうにしても、なにがしかの敬意はふくまれる。それが実の娘だとわかったからには、もはや敬意をはらう必要がない。その微妙な敬意の差異が用字にあらわれているのである。

そのほかの対称詞には、目下につかう「キサマ」と「テメエ」がある。使用者は、大旦那、清三郎、船八の親方である。「キサマ」には、[上]では「其方」、[下]では「貴様」があてられる。「テメエ」には、[上]では「其方」、[下]では「汝」があてられている。

7. まとめ

本稿のはじめに、この小調査に関して、いくつかの問題を設定した。その一つは、時間をおいておこなわれる速記・翻字の作業で、表記の統一性はどこまで保全されるかということだったが、これはある程度は統一がたもたれるが、本稿の調査でいう「上」と「下」で、かならずしも継続性はないという結果になった。もっとも、本稿で報告したのは異同があるものを中心であり、量的には同一のものが多数をしめている。

それにもかかわらず、それぞれの内部では統一的な用字をおこなおうとする意識が濃厚であることが確認できた。これが第二の問題である。もちろん、それはここでみた人称詞などの待遇意識にかかわるものに顕著な傾向であることは否定できない。しかし、思いつきで漢字をあてていくのではなく、一定の基準がすくなくとも人称詞に関してはあることがたしかめられた。

最後の問題は、それにもかかわらず、表記のユレがなぜ生じるのかということである。「4. 落語速記における表記のユレ」で指摘したような例外の存在の説明は、一般語ではむずかしい。人称詞にかかわる語でも、連続した文脈で「阿母さん→尊母さん→老母さん」というような例がみられる。「4」で提示した変字というような原則がはたしてなりたつのかどうかは、今後の検討課題である。

【文献】

- 清水康行 1988 『牡丹燈籠』の漢字、『漢字講座 9 近代文学と漢字』
1998 速記は「言語を直写」し得たか—若林珪蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性一、『文学』9-1
- 田島 優 1998 近代漢字表記語の研究、和泉書院
- 野村雅昭 2001a 口語資料としての明治期落語速記、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』46-3
2001b 明治期落語速記の語彙構造、『早稲田日本語研究』9
2001c 明治期落語速記の表記、『日本語史研究の課題』